OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	『阪大日本語研究』8号（1996）要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 107-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7006
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本語の談話研究

——内的場面と接触場面の場合——

J. V. ネウストプニー

キーワード：ポストモダン，談話研究，接触場面

本稿は，所載論文を紹介し，それぞれを内的場面と異文化間接触場面の研究のフレームワークの中で位置づける。仁田，庵の論文は前者，黄，ナカミズ，由井，俣野の論文は後者の枠に入る。談話研究への種々のアプローチ間の橋渡しという課題の重要さが認められるが，談話研究の多様性を保持する必要性も強調される。

語り物の中のモダリティ

仁　田　義　雄

キーワード：テキスト，語り物，論述，モダリティ形式，条件表現

本稿では，〈語り物〉と仮称するテキスト・タイプを設定し，語り物でのモダリティ形式が，物語の主筋の展開にどのように関っていくのか，といったことを考察した。これは，モダリティ形式，主に有標のモダリティ形式のテキスト機能を考えるということでもある。そして，有標のモダリティ形式を取る文は，心内発話や会話文的な存在として，主筋の展開とは異なったテキスト形成機能を持つ，ということを見た。また，語り物では，条件表現も，原因の表現とは異なり，有標のモダリティ形式の文と同じく，主筋の展開とは異なったテキスト機能を持つことを見た。

「それが」とテキストの構造

——接続詞と指示詞の関係に関する一考察——

庵　　功　雄

キーワード：「それが」，結束性，予測裏切り，テキスト的意味の付与，指示性（referentiality）

日本語のテキストの構造を考える上で重要な役割を果たすのが，接続詞と指示詞である。本稿では，これまで明示的な記述がなかった両者の関係を，主に「それが」という形式に注目して論じた。具体的には，まず，「それが」を，それを含む文において，先行文脈から予測される内容を裏切る内容が述べられるということを先触れする機能を持つ接続詞と規定し，そうした性質が現れる理由を次のように説明した。即ち，「それが」は「その」の使用が義務的な「そのＮＰが」と密接な関係があり，それによって，「そのＮＰが」と同様にテキスト的意味を付与され，義務的なテキスト的意味の付与の帰結として予測裏切り性を持つ，というものである。さらに，考察の一環として「それが」と同様の予測裏切り性を持つ接続詞として「それを」を認めた。そして，「それ＋助詞」の形の接続詞の中で「それが」「それを」だけが予測裏切り性を表せるのは，「が」「を」が具体的な意味を持たない文法格であるためである，とした。

在日韓国人の敬語運用の一斑

――日本語と韓国語の待遇規範意識のはざまで――

黄　　鎭　杰

キーワード：コード切り替え，エスニックマーカー，待遇規範意識，敬語運用

本稿は，体系としての敬語を有する日韓両言語の影響を受けている，ある在日韓国人の敬語運用に関するケーススタディである。1世や2世では，本国文化の変容と日本文化への同化とを両方経験している者も少なくない。今回の調査対象者は，プロフィールからも察せられるように，韓国の規範意識に関して両親や義理の両親から強く影響を受けており，また，在日社会を基盤においた人間関係ネットワークが中心の人々である。

本稿は，両言語の待遇規範意識をどのように認識し，それが対在日韓国人コミュニケーション場面での敬語運用にどのように顕在化するかを明らかにすることに主眼において，主としてインフォーマントの内省にもとづいて分析を加えた。

日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語の使用

エレン・ナカミズ

キーワード：社会的ネットワーク，日本語使用，コード切り替え

日本の様々な地域にはブラジル人労働者が増加し，ブラジル・ポルトガル語コミュニティが形成されつつある。関西も例外ではない。筆者は大阪府と滋賀県を中心として，ブラジル人が日常生活の中で，どのような場で誰とどのような関係を持っているか，つまり，日常においての社会的ネットワークを探ってみた。こうしたネットワークの性質がブラジル人の日本語使用に影響を与えるという仮説を基に，あるブラジル人話者（B1）が初対面の日本語母語話者の女子大学生および50代の主婦J2と，それぞれ一対一で行なった会話に焦点を当てて，B1の言語的な特徴，とりわけ話し相手によるコード切り替えを調べた。その結果，B1は年齢を意識せず，どちらに対しても表現形式の上でのコード切り替えを行なわないことが判明した。この行動パターンには二つの原因が考えられる。一つは，長時間日本語にさらされる領域が職場に限られているため，職場での日本語のバラエティのみを用いるようになるということである。もう一つは，年齢による上下関係よりも，親疎関係に基づく「心理的な距離」が話し相手の態度により影響をあたえるということである。そのような態度の違いは表現形式よりも，会話の展開の仕方に表れている。

旧ヤップ公学校卒業生の日本語談話能力

——訂正過程についての一考察——

由　井　紀久子

キーワード：南洋群島，ヤップ，談話能力，訂正，公学校

戦前日本は委任統治により旧南洋群島（ミクロネシア地域）に公学校を設置し，日本語で初等教育を行なっていた。公学校卒業生は卒業後，日本人のもとで働くなどして日本語能力を付けていった。戦後約50年になろ

うとする現在でも卒業生は日本語能力を維持し続け，日本人と，あるいは他の島の人々とのコミュニケーション手段として日本語を使用している。小稿ではヤップ公学校卒業生の日本語談話能力のうち語彙的な問題により生じた訂正過程を取り上げ，分析を試みた。その結果，訂正の過程を解決に向かう3段階に分け，最終段階に単語再浮上，類義表現による代用，説明的表現による代用，文脈依存の語による代替，相手への説明要求，非言語手段選択，放棄の7つのストラテジーが観察された。また，この段階のストラテジー選択と言語習得段階には相関関係が見られる可能性が示唆された。

接触場面における話者交代

侯　野　夕　子

キーワード：接触場面，話者交代，ゲスト－ホスト

接触場面における話者交代を，個々のターンの関係に関するローカルなレベルと，会話計画など大きな枠組みに関するグローバルなレベルの二つの観点から分析した。その結果，会話のプランを遂行できない，期待される参加のルールに違反する，などのグローバルなレベルの問題点が見られた。したがって，これまで話者交代はローカルな観点から研究が行われてきたが，接触場面の場合，ローカル・グローバル双方の観点からの分析・教育が必要であると思われる。また，参加者の接触場面性に対する意識の強さの程度によって，会話における役割分担の期待が生じることがわかった。役割分担の期待が一致した場合，情報交換が促進される。一方，期待が一致しない場合は相互交渉が活発に行われず，情報交換が阻害される。